

原資料デジタル化が歴史学研究にもたらす影響

南友紀子（慶應義塾大学大学院）
sing_at_dawn@a6.keio.jp

1. はじめに

1.1 背景と研究目的

歴史学研究において、史料とは、研究の対象であるだけでなく、研究における解釈や主張を反証可能とするために、歴史学が科学的学問である上で不可欠な根拠として扱われてきた。史料には、過去の痕跡を示す資料の現物そのものである原資料と、紙やマイクロフィルム、デジタル形式による原資料の代替物の両方が含まれる。このうち特に原資料は、歴史学研究の対象物として伝統的に重要視されてきた。

一方で、近年では、歴史学研究における原資料デジタル版の浸透が指摘されている。Sinn(2012)¹⁾などの引用分析による調査や、ITHAKA S+R²⁾、Sinn(2014)³⁾によるインタビューや質問紙を用いた調査などでは、歴史学研究や人文学研究における原資料デジタル版の利用実態の広範な調査が試みられている。

しかし、引用分析では論文の引用に表れない研究上の史料利用について明らかにすることはできず、既存のインタビューや質問紙調査は原資料のデジタル版の利用の有無に主に焦点を当てられている。原資料重視の傾向が強い歴史学研究において、原資料のデジタル化が研究の各プロセスにおける史料の扱われ方にどのような変化をもたらしたかを明らかにすることは、歴史学研究における原資料デジタル化の意義を考える上で不可欠である。そこで、本研究では、歴史学研究の具体的な研究プロセスをふまえ、原資料のデジタル化が及ぼす影響と、歴史学研究者の影響に対する認識について明らかにすることを試みる。

1.2 歴史学の研究プロセス

本研究では、遅塚⁴⁾による歴史学の作業工程を元に、歴史学の研究プロセスを「問題設定」「入手」「史料解釈」「事実解釈」「再構成」の段階に分けて検討することにした。「問題設定」は、獲得した文脈や背景知識から研究方針の決定や問題設定を行う段階、「入手」は設定した問題設定に沿って史料を入手する段階、「史料解釈」は史料批判による事実認識の段階、「事実解釈」は「史料解釈」で明らかになった諸事実の間の関連から歴史的意義を明らかにする段階、「再構成」は解釈の結果から歴史的見解を構築し、それらを論文などの成果物によって公表する段階である。

2. 調査概要

2.1 調査方法

2013年8月から11月に、歴史学研究者に対し、原資料のデジタル化の各研究プロセスへの影響に関する約1時間の半構造化インタビューを実施し、各々の研究における研究と史料の関わりについて回答を得た。インタビューは、①研究分野・研究内容、②研究対象である史料、③研究目的と史料との関わり、④史料を解釈する過程、⑤史料と研究成果との関わり、⑥研究プロセスにおける他者との共同性、⑦原資料・従来の代替物・原資料のデジタル版の位置づけという枠組みに沿って実施した。

2.2 調査対象

半構造化インタビュー調査の対象となる研究者は、日常的に古典籍や文書等の文字資料を原資料とし、実際に原資料のデジタル版を研究

において利用したことのある歴史学研究者を選定した。歴史学研究者の選定は基本的にスノーボール方式を用い、インタビュー回答者から条件に該当する新たな研究者を紹介してもらうという方法で、様々な分野を研究対象とする14名の歴史学研究者から回答を得た（表1）。

表1 インタビュー対象者

研究者	研究分野
A	近現代日系人移民史
B	東欧近現代民族秩序形成史
C	木簡研究
D	大日本史料（史料集）編纂
E	日本近代経済・経営史
F	日本芸能文化史
G	中国明清社会経済史
H	情報歴史学、史料学
I	中世イギリス史
J	仏教学
K	日本中世経済史
L	中世英仏関係史
M	中国近現代史
N	日本中世史

回答者のうち4名は、歴史学研究者であると同時に、原資料デジタル化に関する共同的研究プロジェクトの参加者である（表1下線）。この4名については、スノーボール方式による紹介にはよらず、科学研究費助成事業データベース掲載の研究概要および研究実績報告書の記述から、研究プロセスの一部として原資料のデジタル化を位置づけている研究課題の研究代表者であることを条件に選定を行った。

3. 調査結果

本研究では、原資料デジタル化による歴史学研究者の研究プロセスへの前提的な影響として史料の「入手」プロセスに対する影響が存在し、その結果として、歴史学研究者の研究その

ものである他の研究プロセスや、歴史学研究者が属する研究分野全般に対して影響がもたらされていることが明らかになった。

3.1 「入手」プロセスに対する影響

「入手」プロセスに対する影響のうち最も基本的な影響として、14名の回答者全てから、主に原資料の利用と比較して、史料入手の容易化や効率化が挙げられた。このような言説には、単なる史料閲覧の容易化だけでなく、「ウェブで見れるものも結構多くなったので、そういう意味では（所蔵機関訪問の）手間が省けるようになった」（E）というような原資料の所蔵機関へ訪問する回数の低減、「（デジタルでは）一枚撮り忘れたなと思ったらすぐに確認できるので、（再入手のために訪問することは）ない」（F）というような「史料解釈」プロセスや「再構成」プロセスのための原資料の再入手の手間の低減、「それまで今まで自分の手元に置けなかったものが、手元に置けるわけですから、研究の仕方は格段に変わったと思う」（A）というような従来研究プロセス中での閲覧機会が限られていた史料の研究プロセス中での随時閲覧の可能化などが含まれる。

また、既に翻刻などの活字による代替物が存在する分野や、近現代の比較的活字化が容易な分野の研究者を中心に、「（デジタル化の恩恵は全文）検索っていうのが一番大きいと思いますね、検索でテキストが得られるということが」（J）のように、史料本文がデジタルテキスト化されることにより史料の全文検索が可能になることによる有用性も認識されていた。

その他の「入手」プロセスに対する影響としては、入手可能な史料の拡大が指摘されていた。このような拡大には、入手労力が減少したことによる入手可能な史料の増加による拡大と、「それで今まで見せてくれなかったことが多いんですね。（中略）だけど今はデジタル版を見ればいいでしょっていうことで（公開して

くれる)」(M)という意見に見られるような、所蔵機関による史料公開の潮流がデジタル化でより促進されたことによる拡大が存在した。これらのような拡大は、「沢山の知識を網羅しなければいけなくなっているんですね、(中略)そしてそれが、情報が網羅できるようになってきている」(J)、「長期にわたる数量分析、我々の細かい数量を追いかけていくような研究をする上では、デジタル化するというのは非常に良かったんじゃないかな」(E)というように、史料群のより網羅的な入手や、量的研究の容易化をもたらしていた。

一方で、検索システムを利用することで史料入手が効率化されることに関して、「デジタルって結構点と点の関係になるじゃないですか。(中略)その史料は見れるけれども、その関連史料って言うのは見なかったりする」(F)というように、原資料や従来の代替物の閲覧時に起きていた史料との偶発的な遭遇が生じにくくなっていると指摘した回答者も存在した。

3.2 研究プロセス全般に対する影響

「問題設定」プロセスへの影響としては、「検索をしてから考えるという習慣が多くの研究者についている」(H)というように理論から仮説を構築する演繹的仮説から史料調査の中で仮説を構築する帰納的仮説への転換の推進や、「とにかく出来る限り写真を撮って(収集する)」(L)というように事前の問題設定に縛られない網羅的な史料収集、「(デジタルでは) 試行錯誤を何回でもできる」(D)というように問題設定やそれに伴う解釈の試行の容易化などを挙げた回答者が存在した。

「史料解釈」プロセスへの影響としては、「デジタルデータで見ると、ここに一文字入っているよね、とか、でもこれ異本で書いてあったことだよ、とかいうこととかが、容易に調べることができる」(N)というように、従来の代替物よりも原資料に近い性質をデジタル版

に認めている発言をした回答者も存在した。また、より多くの史料が閲覧可能になることで、「(史料を) ハンドリングする時の勘ってというのはすごく早く身につく」(A)というように、デジタル化が対象史料群の史料解釈の感覚の獲得に有用であるといった意見も得られた。

一方で、研究プロセス中での史料の随時閲覧の可能化や史料を容易に入手できるようになることにより、「(容易に入手できると) 一つの史料を丁寧に読もうという意識がだいぶなくなっちゃう可能性はあります」(G)というように史料に対する際の緊張感や意識が低下する可能性に対する懸念や、原資料と異なり特別な史料探索の訓練を経なくても容易に史料を入手できるようになることで、解釈のための前提知識や方法論が未成熟の状態史料を扱うことにより、史料を十分に解釈できないまま研究を進めてしまうことに対し、「史料も扱えないのにデータベースだけ使って、簡単に研究して研究したつもりになっているのは、いいのかな? って思いますよね」(C)という懸念を表明する回答者も存在した。

「事実解釈」プロセスについては、「史料解釈」プロセスにおける懸念と関連し、史料相互の関連性を正しく把握できないことで誤った事実解釈を行うことの懸念を表明した回答者は存在したが、研究における「事実解釈」そのものに変化をもたらすデジタル化の影響については特に回答者からは得られなかった。

「再構成」プロセスについては、地理情報システム(GIS)の利用や史料データベース構築のような従来の論文のような成果物と異なる新たな成果物を挙げた回答者が存在した。これらの成果物は、伝統的な成果物である論文など同等の学術的地位はまだ確立していないが、歴史学研究において多様な成果物の可能性が認められはじめていることを示している。また、「(研究を) 始めるまでのプロセスが非常に短

縮化された」(I)、「研究の昔のやり方と今のやり方というので比較した場合だと、おそらく時間は短縮できている」(E)など、史料の「入手」プロセスへの影響により、研究そのものにかかる時間の増加や、成果に到達するまでの時間の短縮などといった変化も指摘された。

3.3 研究分野全般に対する影響

研究分野全般に対する影響の一つとして、研究の拡大が指摘された。これには、歴史学研究者と、他分野の研究者や一般人に対する二つの拡大がある。原資料のデジタル化は、歴史学研究者に対しては、「(デジタルで史料が見られるようになれば)同じような研究環境を日本中あるいは世界中どこにいても得られる」(K)というように研究者間の原資料や従来の代替物に対するアクセスの制限を取り払うことにより研究の拡大を促し、特別な史料探索の訓練を経ない他分野の研究者や一般人による史料利用は「一般に歴史を興味を持っている人にも使ってもらえる」(C)ことで可能になる。

歴史学研究の共同化も、原資料デジタル化プロジェクトの参加者を中心に影響として指摘された。歴史学研究は伝統的に個人研究が主体であるが、これらの回答者からは、「史料解釈」や「再構成」プロセスにおける、同分野の研究者や、情報科学などの異分野の研究者との原資料デジタル版やウェブ上の共同研究環境を通じた共同の実践や可能性が報告された。本研究では、「論文の中で、個別に鎌倉遺文の誤りが正されているという部分があって、それを全体として見る手段がない」(D)ために従来個々の研究者が解釈を行っていた領域において、ウェブ上で複数人の研究者の共同で解釈を行うという試みによって解釈の可視化が行われる例などが存在した。

また、原資料のデジタル化は、歴史学の研究コミュニティにも変化をもたらす。デジタル化は所蔵機関による史料公開の潮流を促進させ

るが、その結果利用可能な史料が増加することで、「網羅すべき情報が細分化してきている」(J)、「史料紹介とかみみたいな研究成果は多分なくなる」(N)というように、研究のさらなる細分化や、単純な史料解釈以上の成果が求められるようになる可能性が指摘された。また、史料へのアクセス容易化が「史料の根拠があるという形で史料を武器にして議論を活発にする」(G)という意見のように、研究者コミュニティでの議論の活発化や、根拠としての史料への更なる依拠に対する可能性も指摘された。

一方で、容易に史料が入手できることにより、「成果があったら報告したい、(現地に)還元したいっていう(中略)、デジタルを見てもそういう気持ちには多分ならないと思う」(F)というような研究に対するモチベーションの低下や、「デジタル化っていうのは、人のつながりを全部こうすっ飛ばしてやれちゃう」(I)というような現地調査を行わないことによる研究者間の交流の減少、「意図的に取捨選択してデジタル化している可能性がある」(B)というようなデジタル版のみが提供される史料の選択的なデジタル化やデータ上での改竄などを懸念として表明した回答者も存在した。

引用文献

- 1) Sinn, Donghee. Impact of digital archival collections on historical research. *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. 2012, vol.63, no.8, p.1521-1537.
- 2) Rutner, Jennifer; Schonfeld, Roger C. "Supporting the Changing Research Practices of Historians". *ITHAKA S+R*. 2012.
- 3) Sinn, Donghee; Soares, Nicholas. Historians' use of digital archival collections: The web, historical scholarship, and archival research. *Journal of the Association for Information Science and Technology*. 2014, vol.65, no.9, p.1794-1809.
- 4) 遅塚忠躬. 史学概論. 東京大学出版会, 2010, 484p.